

東三河地域の過去人口と地域の考察

公益社団法人東三河地域研究センター 主任研究員 澤田貴行

1. はじめに

HRRC Focus Vol.9¹では、「将来人口推計」を用いて、地域メッシュレベルでの消滅可能性等の報告をしたところである。そのなかでは、東三河地域の将来人口を分析すると、全体を通して将来人口は減少傾向であったが、東三河地域の南部に位置する豊橋市、豊川市、蒲郡市及び田原市と北部に位置する新城市、設楽町、東栄町、及び豊根村には、ある程度の類似性があり、特に北部の減少は大いに危惧すべきであることが明らかとなった。また、将来人口の減少は想定以上の進行となっていることも示唆された。

このような将来の人口推移分析は地域の“あるべき姿”を考察するうえで非常に重要なことであるが、この理解をさらに深めるためには過去の人口推移も把握しておくことも重要である。

そこで、本レポートでは、国内の人及び世帯の実態を把握するための国勢調査の実施当時の市町村ではなく、現在の東三河8市町村へ換算した人口として整理した結果を報告する。

2. 国勢調査結果の可視化と統合

2-1 データの可視化

国勢調査は国内の人口及び世帯の実態を把握し、各種行政施策その他の基礎資料を得ることを目的に第1回の大正9年/1920年から直近の第21回の令和2年にわたり実施されている。なお、本年10月1日には、第22回国勢調査（令和7年/2025年）が実施される。

この国勢調査の結果は、総務省統計局ホームペ

ージ²より PDF や CSV ファイルにまとめられ公表されている。なお、国勢調査結果からは大正9年/1920年の人口は345,641人であり、令和2年/2020年は748,230人とおよそ2.2倍もの人口増となっている。

また、行政区域のデータは国土数値情報ダウンロードサイト³にて、1920年から整備されており、古いものでは国勢調査年ごとに、最近のものでは年ごとに位置情報データとして公表されている。なお、1920年の市町村数は64、2020年は8となっている。

それぞれのデータを地理情報システムにより国勢調査年と市町村を軸にデータ結合をすると人口状況を地図として可視化ができる。図1-1に1920年、図1-2に2020年の結果を示す。

1920年は自治体も多く、1つの自治体の人口規模も小さいことに対し、2020年は、北設楽郡3町村はすべて5,000人を下回り、30万人超の豊橋市や10万人超の豊川市と大きな相違がある。

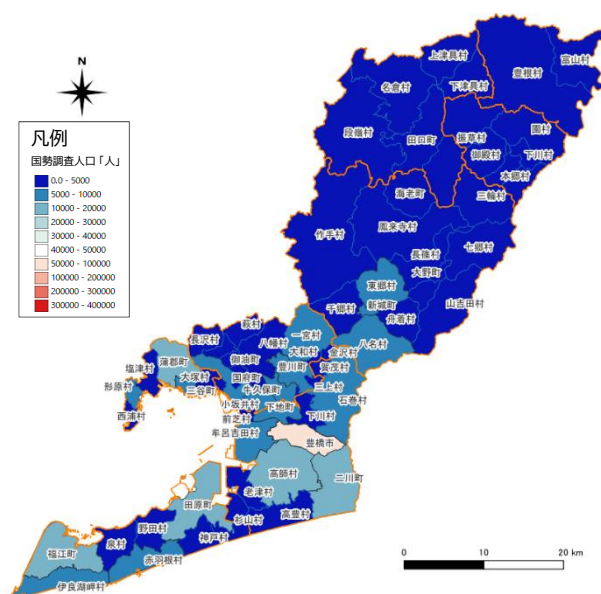


図1-1 1920年人口の可視化

¹ https://www.hrrc.jp/pdf/03/hrrcfocus_9.pdf

² <https://www.stat.go.jp/index.html>

³ <https://nlftp.mlit.go.jp/ksj/index.html>

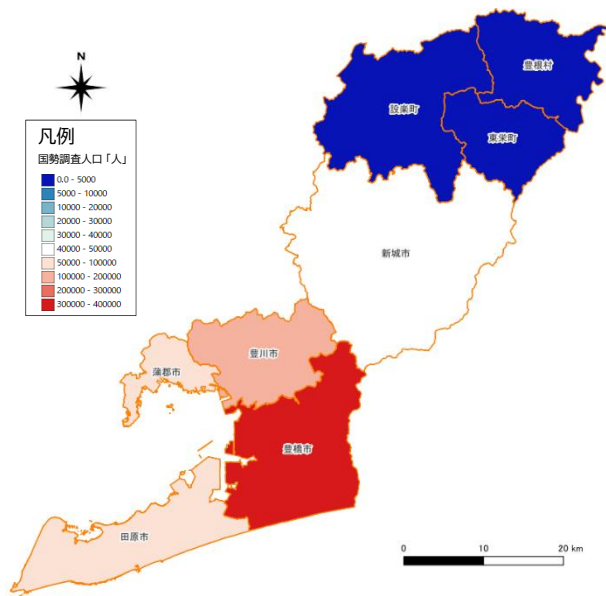


図 1-2 2020 年人口の可視化

2-2 市町村合併を考慮した人口分析

図 1-1、図 1-2 を俯瞰するとき、1920 年と 2020 年では市町村数が相違しており可視化による評価は難しいと言わざるを得ない。このため、過去における複数の市町村毎に人口密度を算出したうえで、現在の 8 市町村に取り纏めた人口の可視化を行う。1920 年人口を 8 市町村に取り纏めた結果を図 2 に示す。

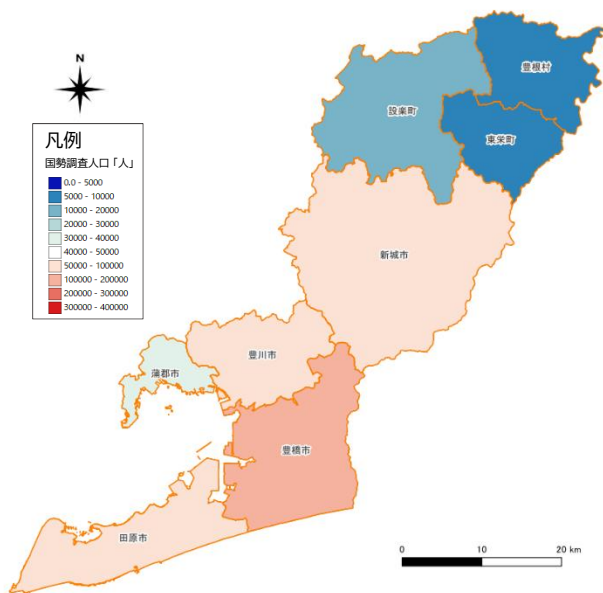


図2 1920 年結果の可視化(8 市町村換算)

1920 年（図 2）と 2020 年（図 1-2）を比較したとき、色の濃度の違いは、1920 年では“淡い（全

体的な差が小さい）”ことに對し、2020 年では、“濃い（全体的な差が大きい）”ことがわかる。つまり、1920 年から 2020 年の間において、東三河地域の人口は豊橋市や豊川市を中心とした南部では増加傾向にあり、新城市や北設楽郡では減少傾向であり、“南北の人口格差”は大きくなった。なお、表 1 に 1920 年と 2020 年調査の人口を示す。

表1 大正 9 年と令和 2 年人口の比較

【単位:人】

	1920年 (大正9年)	2020年 (令和2年)	増減率
豊橋市	131,641	371,920	182.5%
豊川市	51,310	184,661	259.9%
蒲都市	31,982	79,538	148.7%
新城市	52,575	44,355	-15.6%
田原市	50,502	59,360	17.5%
設楽町	13,030	4,437	-65.9%
東栄町	8,925	2,942	-67.0%
豊根村	5,675	1,017	-82.1%
計	345,641	748,230	116.5%

3. 1920 年から 2020 年の人口推移

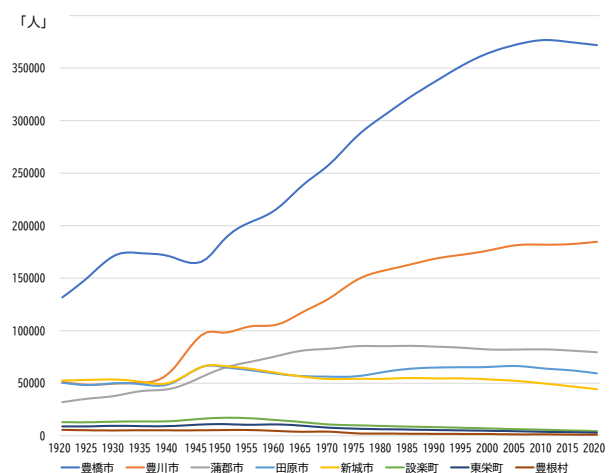


図3 1920 年から 2020 年の人口推移(8 市町村換算)

国勢調査の“あらし”として、実施年は 1920 年、1925 年という具合に 5 年毎に調査が行われているが、1945 年/昭和 20 年は行われなかった。その代わり 1947 年/昭和 22 年に臨時調査が行われ、以降は 1950 年、1955 年と 5 年ごとに調査が行われ 2020 年が直近の調査である。これまでの 21 回、100 年にわたる調査の結果を現在の 8 市町村に取り纏めた人口推移として集計した。結果を縦軸に人口、横軸に実施年として図 3 に示す。なお、実施年の間では人口は分からないが、自然な変化と

るように補間をしている。

図3から豊橋市と豊川市では大きな人口増であり、豊川市では、1940年から1945年に大きな増加があり、かつその後も緩やかな増加が見られ、豊橋市では1945年以降に継続的な増加が見られる。これらは第二次世界大戦、戦後復興から高度成長といった社会環境の変化による影響があったことが推察される。

引き続き、他の市町村の推移を検証するため、それぞれの市町村の人口の最大値を1.0、最小値を0.0となるように正規化した結果を図4に示す。

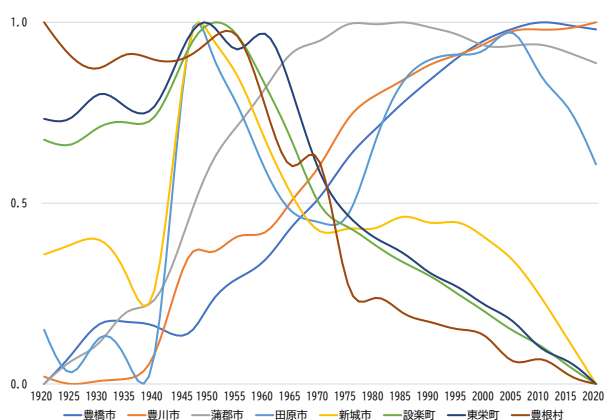


図4 大正9年から令和2年の正規化人口推移(8市町村換算)

図4から、継続的な増加であった：豊橋市／豊川市／蒲郡市<A>、継続的な減少であった：設楽町／東栄町／豊根村、中間的な傾向として全体としては増加傾向の田原市<C>と減少傾向の新城市<D>という4グループを見出せる。なお、4つの傾向はあるものの、<D>には、社会環境変化である第2次世界大戦後が人口のピークであり、戦後復興時の住宅やインフラ資材需要に対する林業発展や高度経済成長の工業化進展の影響がうかがわれる。

3. 東三河の“賑わい”の検証

前節では、人口数における分析評価を行ったが、引き続き市町村の総面積に対する人口密度による評価、並びに東三河には多くの森林等の人が住みにくい地形が多く含まれているため、可住地面

積に対する人口密度の評価を行う。

総務省統計局の提供する「都道府県・市区町村のすがた（社会・人口統計体系）」⁴から得られる2020年度の東三河市町村の収集結果は表2のとおりである。

表2 東三河市町村の総面積と可住地面積

	市町村別面積[km]	市町村別可住地面積[km]	可住地面積の割合
豊橋市	261.86	219.55	83.8%
豊川市	161.14	102.53	63.6%
蒲郡市	56.92	39.66	69.7%
新城市	499.23	83.65	16.8%
田原市	191.12	137.48	71.9%
設楽町	273.94	27.32	10.0%
東栄町	123.38	11.42	9.3%
豊根村	155.88	10.79	6.9%
計	1723.47	632.4	36.7%

ここで可住地面積とは、総面積(北方地域及び竹島を除く)から林野面積と主要湖沼面積を差し引いたものである。

3.1 東三河の人口密度

現在の8市町村に集計した国勢調査の人口を表2の市町村面積で除した人口密度を推移としてまとめた結果を図5、表3に示す。

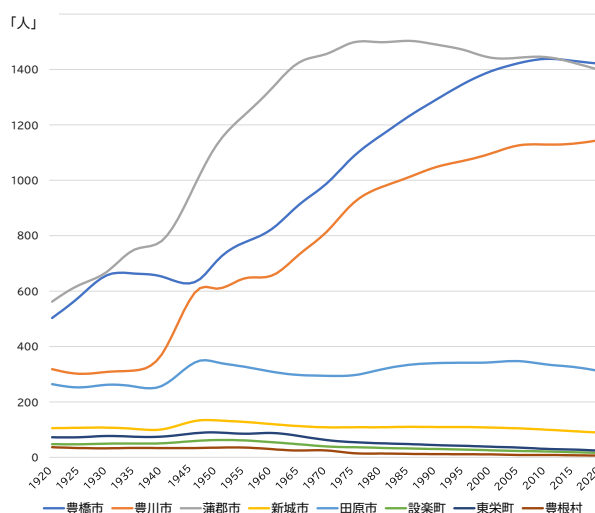


図5 人口密度推移(8市町村換算)

表3 人口密度推移(8市町村換算、20年間隔)

	1920年	1940年	1960年	1980年	2000年	2020年
豊橋市	503	653	823	1,162	1,393	1,420
豊川市	318	371	655	975	1,097	1,146
蒲郡市	562	781	1,330	1,498	1,443	1,397
新城市	105	101	120	109	107	89
田原市	264	257	309	317	343	311
設楽町	48	51	55	34	25	16
東栄町	72	75	88	51	38	24
豊根村	36	33	30	14	10	7

赤色背景は上位3位、緑色背景は下位3位

⁴ <https://www.e-stat.go.jp/regional-statistics/ssdsview>

表 3 から東三河全体において、人口密度は、その時代における順位で見ると大きな違いはない。また、図 5 からその増減は、継続的な上昇である豊橋市／豊川市／蒲郡市<1>、増加減の割合が低い新城市／田原市／設楽町／東栄町／豊根村<2>という 2 つのグループがある。なお、<1>における 1 位は 1920 年から 2020 年までは蒲郡市、2013 年以降に豊橋市となった。

3.2 東三河の可住地人口密度

「3.1 東三河の人口密度」では、市町村面積よる人口密度の評価をしたが、東三河は海から山にわたる地形であり、地域の土地利用には大きな相違がある。このため“人が実際に居住・生活することが可能な地域”としての評価を行う。

このような地域は“可住地”として「全国都道府県市区町村別面積調⁵」において面積が公表されている。なお、密度分析には、本来はその年の可住地面積を使用すべきである。しかしながら、データ提供は 1980 年度までのため、“可住地面積は年とともに急激な変化はない”という仮説のもと 2020 年度の面積を利用する。

現在の 8 市町村に集計した国勢調査の人口を表 2 の可住地面積で除した可住地人口密度「人/㎢」の推移をまとめた結果を図 6、表 4 に示す。

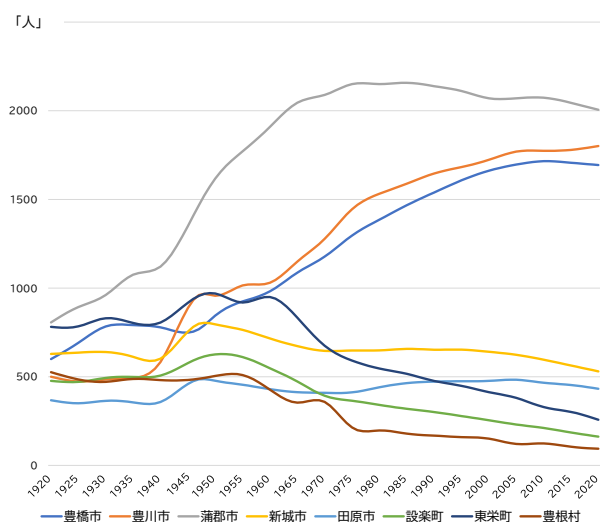


図 6 可住地における人口密度推移(8 市町村換算)

表 4 人口密度推移(8 市町村換算、20 年間隔)

単位: 人/㎢

	1920	1940	1960	1980	2000	2020
豊橋市	600	779	982	1,386	1,662	1,694
豊川市	500	583	1,030	1,532	1,723	1,801
蒲郡市	806	1,121	1,909	2,151	2,070	2,005
新城市	629	601	716	648	641	530
田原市	367	358	430	441	477	432
設楽町	477	506	548	341	255	162
東栄町	782	806	949	546	413	258
豊根村	526	481	427	197	151	94

赤色背景は上位 3 位、緑色背景は下位 3 位

表 4 から、可住地人口密度は、その時代における順位に違いがある。具体的には 1940 年ごろまで大きな違いがあり、1920 年の順位は、1 位蒲郡市／2 位東栄町／3 位新城市であり、2020 年では、1 位蒲郡市／2 位豊川市／3 位豊橋市と大きく相違していた。また、図 6 から、図 5 の人口密度の増減のグループ<1><2>に相違はなかった。

可住地人口密度を実際に人が暮らす“賑わい”“としてみるなら、この 100 年間に東三河の”賑わい“は大きく変化したことがうかがわれる。

4. まとめ

東三河の人口変化を知るために、HRRC Focus Vol.9 では将来人口の推定を行い、今回は国勢調査結果を利用して現在の 8 市町村レベルに換算して過去の人口変化を俯瞰した。

社会環境変化である第二次世界大戦を境にして豊川市で著しい増加があったことを含めて、東三河南部に位置する豊橋市や豊川市では継続的な人口増加があった。一方、現在、深刻な人口減少が懸念される北部に位置する新城市、設楽町、東栄町、及び豊根村では、戦後まもなくまでは、南部と“賑わい”に大きな違いはなかった。しかし、戦後・高度成長期を境に北部の人口減少は激しくなり、現在までに大きな差分を生じたことがわかった。

筆者は 2000 年から 10 年ほど東栄町で暮らしたが、地域の人たちからは“今は人が少なくなったが昔は賑やかだった”とよく耳にした経験がある。今回の報告はこの言葉を如実に表したものであったと感じている。

⁵ <https://www.gsi.go.jp/KOKUJOHO/MENCHO/backnumber/GSI-menseki20201001.pdf>